

1 組合を結成して社長を追放！ 日本ビクター激動の戦後を 検証する

○東洋一のビクター工場が廃墟になった

“朕深く世界の大勢と帝国の現状に鑑み、非常の措置を以て時局を收拾せんと欲し、こゝに忠良なる爾臣民に告ぐ。朕は帝国政府をして、米英支蘇四国に対し、その共同宣言を受諾する旨通告せしめたり…”昭和20年8月15日は、日本が建国以来味わった、最も悲惨で、最も劇的な一日であった。

正午。君ヶ代の奏楽で始まった玉音放送は、ジリジリと照りつける真夏の太陽の下、之に聞き入る人々の胸を突き刺すように響き亘った。呆然と立ちつくす者、地にひれ伏して慟哭する者、死の恐怖から解放された安堵感にひたる者…、各人各様の胸に去来するものは、一体何であったことであろう。

天皇を現人神に祭り上げ、八紘一字の名のもとに、幾多の同胞の生命を奪い、幾多の他国人の生命を奪い去った軍部独裁の大日本帝国は、遂に此の日、其の姿を消したのである。中国侵略に端を発した15年にも及ぶ悪夢の戦争が、今しも終りを告げたとはいえ、其の失ったものは余りにも大きく、国家経済は将に壊滅的な打撃を受けていた。窮乏とインフレが私達国民を直撃する。焦土と化した東京の街々には、飢餓に瀕して焼跡をさまよう、憔悴しきった人々の姿があふれていた。一方、空襲で焼野原になった京浜工業地帯の多くの工場は廃墟と化し、東洋一を自負した最新鋭のビクター工場の、見る影もない惨状は、目を覆うばかりである。高度の技術を誇ったが故に、軍の特別工場に組み込まれ、電波探知器や対敵音響製品の数々を生産し続けたが故に、B-29の第一目標にされたからであろう。鉄筋はズタズタに垂れさがり、赤錆びた鉄骨が無惨なまでにへし曲がった姿は、今も忘れることは出来ない。

○組合をつくった7人の侍たち

廃墟と化した横浜の本社に、工場の焼跡に集まった従業員たちは、再建の方針さえ示さない伊東禿社長の態度に不満をつのらせていた。職にありつけなければ、食にありつけないと、ビクターに見切りをつけて、進駐軍の労務者を

目指す従業員たちの姿も目立つようになってきた。中には、タイムカードを押して、外に稼ぎに出かける強者(?)もいたという。かくなる上は、労働組合を結成して会社の再建をはかるしか方法はない…、こう考えた高田繁喜、篠崎正、石谷正二、中井勝世、永野恒男、滝井利信、小野保男の7人の侍が結成準備のための準備委員となり、21年1月10日、こゝに日本ビクター従業員組合が結成された。“ビクターの再建は、経営者である東芝の責任ではないか? 伊東禿社長は即刻退陣せよ! これは1、780名の労働者と、ビクター全芸術家による決議である…”発足と同時に組合は、斗争委員長に石谷正二、副委員長に篠崎正、松浦敏夫、書記長に高田繁喜を選出した。斗争体制への移管である。

当時のビクターは、レコードの比重が極めて高く、ビクター再建は、芸術家の去就如何にかゝっていた。そこで、石谷正二、篠崎正、熊倉雄三、成木芳三の文芸部代表委員たちが、芸術家倶楽部の集会に赴き、組合と共同歩調を取る旨の確約を取りつけた。早速、銀座に程近い京橋公会堂で、アーティストと組合員による「公開報告決起のための歌うデモ大会」が21年5月6日華々しく開催されたのである。

○ アーティストと従業員が銀座通りをデモ行進

熱狂的な雰囲気の中で第1部が終ると、いよいよ呼び物の第2部が、熊倉雄三委員の司会で幕を開けた。先ず中山晋平、佐伯孝夫両アーティスト代表による力強い激励の挨拶に始まり、市丸、藤原亮子、平野愛子、竹山逸郎他、ビクター専属歌手による歌の数々が之に続いた。そして、さあ之から人気歌手とスクラムを組んだ前代未聞のデモ行進が始まるというので、ファンや、マスコミも入口に押しかける。殺風景なデモとは、一味も二味も違うレコード会社のデモは、たちまち、黒山の人だかりとなる。トラックに分乗したビクターデモ隊は、京橋から銀座の大道りを行進して新橋に向った。車上で手を振るアーティストや、組合旗を打ち振るビクターマンに向って、進駐軍の兵士たちも立ち止り、PX(服部時計店)の前にさしかゝると、しばし立ち往生をさせられる有様である。人気アーティストが参加したレコード会社の華やかなデモを、新聞や雑誌、ラジオが放っておくわけがない。新聞は之を大々的に書き立て、NHKは此の一部始終を録音して其の日、全国放送をやったのけた。対外PRを狙った此の日のデモは、かくして大成功をおさめ、之に気をよくした一行は、

日比谷音楽堂で再度、アンコール歌唱大会を開いて氣勢を上げたのである。勿論アーティストの出演料はノー・ギャラであったことは申すまでもない。

○灰田勝彦、市丸、藤原亮子は、専属料を辞退した

ノー・ギャラといえば、当時のビクターは破産寸前。従業員の給料は遅配欠配。或る時は、レコードで支払われることもあった。之を耳にした灰田勝彦は、専属料の受取りを拒み、有名アーティストも次々に之に続いた。此の頃の様子を灰田さんが私にこう語ったことを、今も鮮明に記憶している — 「文芸部の社員も、工場の社員も、みんな給料を手にしてないじゃないか。それなのに俺達アーティストだけが、ハイ左様でござんすかと受け取れるかい。俺達は、こうして歌ってりや、食えるさ。だけど会社の社員は、そうはいかない。市ちゃん（市丸）とも話したんだ。俺は受取らない。さっきも他社から、3倍の契約金で誘いに來たので、俺は怒鳴りつけてやった。灰田勝彦を見損うな。会社が苦しいからって、見捨てるようなクサった奴はビクターには、一人もいないよって」……。

○組合を結成して社長を追放

アーティストを主役に仕立てたビクター銀座のデモ行進が、成功裡に終わった2日後の5月8日の午後3時、焼けたゞれた新子安のビクター広場で、社長と組合の青空団交が始まった。頑として辞任を拒否する伊東社長との団交は、夜になって場所を守衛室に移したが、8時を過ぎる頃、会社は遂に組合の提案を受け入れることになった。組合を結成して会社を再建しようという、従業員の願いは、茲に叶えられたのである。経理出身の陰気な伊東社長に代って、ノンキ節を歌いまくる、陽気で開放的な橘弘作社長が就任した。組合は新社長に積極的な再建の取り組みと責任経営を強く要望した。新子安の工場が操業不能のため、戦後日本光学から買収した戸塚工場で、ラジオの生産が再開された。疎開した機械を回送し、日本光学や海軍工廠から入手した機械を使って5AW-1オールウェーブ・ラジオや、RE-11電蓄などの生産にとりかゝったのである。

○工場は真空管のないラジオを出荷した

ところが、部品が手に入らない。購買の担当者が、リュックサックを背負い、足を棒のようにして調達して廻る毎日が続いた。時には真空管がないまゝ、商品を出荷して、不足部品を現地の営業所で調達することも、しばしばである。

部品集めと並行して困り果てたのが、資金集めであった。

銀行からの融資の大半は、従業員の給料で消えてしまう。窮余の策として、全国の有力特約店から資金を仰ぐことになった。営業の責任者と組合の責任者として、全国一軒一軒を歩き廻り、やがて3、000万円の大金を集めることが出来た。此の復興協力金が、ビクターを勇気づけ、ビクターを再興させる原動力となったのである。

○遅配欠配の給料代りに、レコードが支給された

もう一つ、書き加えておこう。当時の森国穂経理部長は、遅配欠配し乍らも資金集めに苦勞を続けたが、給料の代りに、レコードを之に当てるのが、しばしばであった。20枚、30枚単位で支給された此の厄介(?)な代用品を、換金するのが亦一苦勞である。第1に蓄音器を持っている農家を探し当てなければならない。ベートーヴェンの第9なら、重いSPが9枚にも及ぶ。之を背中にかついで、ジャガイモやサツマイモと交換して廻ったものである。しかし、築地スタジオは戦災で全焼。新子安のレコード生産部門は、戦災で火をかぶり、水をかぶって、プレス機械は赤錆びたまゝである。

○港が見える丘／無傷のコロムビアに吹込とプレスを依頼

昭和21年9月、無傷のコロムビア・スタジオを借りてレコードの新吹込を開始することになった。プレスもコロムビアに依頼した戦後初の新曲が、平野愛子の「港が見える丘」。当時レコード5社の中、戦災を受けたのはビクター1社のみで、断トツのコロムビアにキング、ポリドール、テイチクと続き、王者ビクターは氣息奄々の日々を送っていたのである。しかし組合員の必死の努力で、翌年のクリスマスを迎える頃、待望の築地スタジオが復旧した。それにつけても、100%近い戦災を受け乍ら、親会社である東芝に先んじて復旧の歩みをスタート出来た事実は、ビクターの戦後史の記録に残る輝かしい1頁といえるのではあるまいか。しかし、従業員とアーティスト達の涙ぐましい再建の努力にも拘らず、翌くる23年8月、会社は指名解雇による800名の人員整理案を、組合に提示した。其の後会社側は、希望退職方式に切り換えたが、24年10月25日、再び会社は600名に及ぶ第2次整理案を発表し、解雇者617名という非情な結末となったのである。そして翌くる昭和25年、朝鮮戦争が勃発した。デフレ不況にあえいだ戦後の日本経済は、此の特需の恩恵を受け、26年に入ると、一段と其の明るさを増した。「銀座カンカン娘」を

歌ってヒットを飛ばした高峰秀子の「カルメン故郷に帰る」が、日本初のカラー映画として登場。映画にレコードに、「黄色いリボン」が大きな話題を集め、当時世界最高のバイオリニスト、RCAのユーディ・メニューインが来日し、築地スタジオでレコード吹込みを行ったことも、昭和26年の忘れられない出来事であろう。しかし、日本ビクターにとって此の年は、経営本体が東芝から興銀に移り、社内が2つに割れて相争う大波乱の年となるのである。

ここで、組合運動を30年間の長きに亘って推進した、菅沼喜久次元執行委員長に登場願うことにしよう。

○私の歩んだ道／労働運動30年の回顧

（菅沼喜久次）今日は珍しい本を持って来ました。組合の結成に始まって、其の発展に寄与された最大の功労者：高田繁喜さんがお書きになった「私の歩んだ道／労働運動三十年の回顧」という本なのですが、歴史的な出来事が、実にくわしく書いてあるんです。読んでみましょうか ——

○ビクターは、東芝傘下から興銀の支配下に

『26年1月、日本興業銀行は、日本ビクターの副社長として山口利吉氏を派遣してきた。再建整備計画が認可され、之に伴うビクターの増資を、興銀が引き受けたことから、ビクターは興銀の管理会社になったというのだが、興銀のビクターに対する債権保全の措置であったことは明らかである。社内では、第3次人員整理の噂も流れ、従業員の不安は、銀行からの副社長派遣を火種と捉える向きもあった。之と時を同じくして、組合の役員改選があり、前年25票の差で組合長に当選した私は、この選挙に破れ、石谷正二氏が組合長に当選して就任した。石谷組合長と瀬沼書記長、高田組合長と和田書記長というコンビが定着し、毎年の選挙で入れ交って就任していた。』

○石谷組合長と山口副社長が握手

『石谷組合長と山口副社長とは、相互利用の関係で結ばれ、それは日増しに深くなる一方だった。債権者の立場で、銀行から派遣されてきた副社長が、ビクターの社内のフニイキや、風潮や労使関係を見て、自分の責務を果す使法として、労働組合を最大限に利用しようとしたのであろうが、副社長の立場から自己保身を計る手段として考えたとすれば、至極当然であったかも知れない。一方石谷氏にしてみれば、彼が画くビクターの再建と、その野望達成のために、格好な利用相手として山口副社長を据えたに違いなかろう。二人の間で、幹部

職の移動、人事配置に就て取り沙汰の噂が流れ、組合役員の経営幹部就任、部長登用の噂までが、まことしやかに流れた。山口副社長と石谷両氏の密接な関係が深まるにつれて、橋社長と石谷氏の間は冷却の一途を辿り、やがて橋社長と、信望を集めた満州帰りの野辺の両氏は、石谷一派によって、排斥されることになっていったのである。

○持株問題が導火線で役員が対立

石谷執行部と私は、従業員の持株問題で対立が表面化した。“民主化路線に沿って石谷執行部は、組合員の在社年数に応じて株を配分する。最低を10株とし、購入資金は、組合の斗争積立金を之にあてて、組合員個々に融資する。また組合員から委任状をとりつけ、代表して組合長が株主総会に出席する”というもの。之に対して私は、“株式の購入はあくまで任意であるべき。勤続年数に応じて、株の配分を決め、しかも斗争資金を充当して、実質個人に肩代わりすることは、労働組合の自殺行為である”と反論した。遂には“愛社精神のない者は表へ出ろ”と、暴力団まがいの台詞を浴びせられて、事実上決裂となったのである。“元伊東社長邸宅に、家族ぐるみで住みこんだ石谷は、会社に家賃も支払ってはいないではないか、従業員の劣悪な住宅事情も顧みない石谷の態度は許せない”、“石谷は電話で会社の幹部を呼びつけ、昼間から、碁打ちに興ずるなど堕落も甚だしい”、“彼の言動は、明らかに労働貴族趣味だよ、石谷は会社の役員を狙っているに違いない。労働組合の責任者にあるまじきことではないか”、などと痛烈な批判と意見が続出。従業員の持株問題が導火線となって、対立のミゾは深まり、声を大にして批判を浴びせる発言者達の除名追放を画策するなど、彼等の横暴は、目に余るものにエスカレートしていった……。分裂は、あくまで避けるべきだと苦慮してきた私だったが、彼等の暴力的な言動は、もはや許しがたく、やむなしと私は分裂を決断した。

○遂に分裂して日本ビクター正統派労働組合誕生

“私達こそビクター労組の正統派である”という意味をふくめて名称を“日本ビクター正統派労働組合”とし、670名の組合員の中から、120名が参加してくれることになった。役員には、委員長に高田繁喜、副委員長に中根敬三郎、和田喜三郎、書記長に飯塚澁が選ばれた。分裂によってビクター労組と、山口副社長との接近が目に見えて加速し、加えて経営上層部の山口氏をめぐる対立が、公然と噂されるようになった……」

－ 菅沼さん、こんなに面白い、貴重な歴史的な内容が記された本を読ませて頂きまして、誠に有難うございました。こゝで、組合の昔話を聞かせて下さい。

（菅沼）私がしやべるよりも、この本を読んだ方が面白いですよ（笑声）、

－ 興銀がビクターに乗りこんで来る。興銀の山口さんと石谷さんが手を組む。橘社長派は、山口さんたちの興銀一派を快しとしなくなる。高田さんは、石谷さんと手を切って第2組合をつくる。両派がチョーチョーハッシとやりあっている所に、松下が乗りこんでくる……という筋書きになるんです（笑声）

○興銀から松下に経営権が移行

『組合が分裂してから約2年後の28年2月、日本ビクターの経営権は、日本興業銀行から、松下電器産業に移譲された。独禁法で、企業の持株に制限が加えられたことから、興銀から松下に譲渡され、4億5千万円のビクターの債務を、松下が引き受けることになったのである。日本ビクターの松下系列参加に伴って山口副社長が退任した。支柱を失った石谷ビクター労組の内部抗争が激化し、組合は、再び統一に向って方向を転換して行くのである。』

（菅沼）何しろ200頁にも及ぶ此の本を読破するのは大変ですが、お互いに両派が統一を目指して動き始める拡大委員会の所を読んでみましょう……

○会社の組合分断作戦に終止符

『10月30日、両労組の拡大統一委員会と銘打った集会が催された。ビクター労組側から、松浦敏夫、高麗文男、岩崎登の3役と鈴木忠、大野孝一、高野詮栄、稲葉精、関邦芳、藤井定雄、渡辺敏康、曾我三郎、後藤栄、川島正次、大塚定幸の諸君。正統派組合側から、高田繁喜、風間新七、安斎壽雄の3役と、石渡敏博、栗栖一二三、西野隆治、郷勝哉、若林省吾、熊沢喜代次、新井藤吉、鈴木力男、池田賢次郎、山田掌一、高崎利一、野本勇、岡本国光の諸君。特に此の日のビクター労組側に、熱心な統一論者が存在したことが、大きな特長だった。話が進むにつれて、ビクター労組側から、“知らなかった、きかされていなかった”と、私達の面前で、執行部を非難する一幕もあった。聞く所によると、真面目な統一積極論者の幾人かが、労務担当の黛常務に呼ばれ、配置転換を、ほめかされたという。私の念頭に残る此の日の積極的な統一論者は、鈴木忠、大野孝一、高野詮栄の諸君だった……』という所で少し飛ばしまして、“念願の再統一遂になる”所を読みあげましょう ——

『昭和45年10月5日午後3時、横浜の技術ビルホールで統一大会が開かれ

た。菅沼喜久次氏の司会に始まり、資格審査委員に大西伸二、松井篤、運営委員に土屋真、西松松三、議長に今泉信昭、高野道雄、大会書記に堀口一朗、菊池光俊の各氏が選出されて始まった。議案は、次々に満場割れるような拍手で全て採択され、会場は歓喜と興奮に包まれた。“難かしい条件を克服して、統一を成功に導いた松浦さんに心から感謝する……”と謝意を表して固い握手を交した。会場から之に應えて、万雷の拍手が氏に送られた。そして最後に全員の唱和で統一万才を三唱し、菅沼喜久次氏の閉会の辞で、統一大会は、目出度く幕を閉じたのである』

○ 私は富士自動車からビクターに

ー やあ菅沼さん、長々と、有難うございました。こんなにくわしい歴史の物語、改めて深い感銘を覚えますね……所で菅沼さん、貴方は、組合の執行委員長を長年やって来られましたが、何の目的で組合に……と言うと語弊がありますが…（笑声）

（菅沼）私は富士自動車追浜工場、通称富士モーターにいたんですが、首切り反対斗争がありまして、こゝで組合というものを知ったんですヨ。もともと、朝鮮特需で出来た会社でしたから、閉鎖される運命だったんです。やむなく職業訓練所で勉強しまして、昭和35年にビクターに入社しました。当時組合は、2つに、もう分裂していましたね、私は有無を言わずに、正統派組合に直行したら、こう言われましたー“誰も勧誘しないのに、勝手に入って来た者はお前だけだ”と喜ばれました（笑声）。というのは、私がいた富士モーターが、総同盟神奈川金属傘下だったんですから、同じ傘下にある高田さんの組合に入ったと言うわけです（笑声）。前の会社で経験があるもんですから、ビクターの職場会議でも、どしどし発言するクセがついてまして…（笑声）、その中に、目をつけられましてネ（笑声）、3年が過ぎた頃、職場委員から、執行委員に…。そうこうしている中に、風間副委員長が亡くなられたことで、補欠選挙があり、選挙で副委員長になりました。

ー トントン拍子のスピード出世ですね（笑声）

（菅沼）昭和40年でしたか、あのヤカマシイ大和工場の鈴木健さんの職場の正統派組合員から“労務管理が目茶目茶だ”と抗議文が来たので、副委員長のまま、大和分室の専従にさせられました。1年ばかりで改善されまして、横浜の組合本部に書記長になって戻りました。

○組合が1本化して、ビクター南北戦争終わる

ー 松浦さんのビクター労組の方は、営業マン、とりわけ営業所の人が多かったですね。

(菅沼) 当時の営業所の労務管理は、無いにも等しかった。組合員からビクター労組本部に、いくら改善して欲しいという要望を出しても、聞いてもらえず、その中に、我々正統派の方に相談が持ちかけられるようになりました。特に大阪南営業所の原栄君からの要請が強かったので、高田委員長と二人で、現地に飛んだんです。また名古屋営業所からは、ビクター労組と、正統派労組の両方から組合の役員に来てくれというので参りました。結果は正統派の方に軍配が上がりまして、名古屋は遂に支部長1人を除いて、全員が正統派に移籍しました。また、大阪、名古屋以外の全国各地の営業所でも、同じような情況が、相次いで起きました。

私の頭の中に残っていますが、あの頃の騒ぎは、高度成長時代から低成長時代にさしかゝる時でもあり、会社も漸く労務政策改善に取りかゝらざるを得なくなったのですねエ。(菅沼) 36年の4月でしたネ、ビクター労組を味方にまきこんで、会社側が斗った正統派労組との、あの劇的な72時間ストライキによる賃上げ斗争…、あの勝利で、会社側も自らの非を悟ったんですヨ。組合の分断政策をテコにした黛、竹宇治労政に代って、西垣、福島労政に移行するんですね。あの西垣秀正さん、颯爽の登場と相成るんです……(笑声)

○黛・竹宇治から、西垣・福島労政に

(菅沼) まさに颯爽と…のフンイキでしたネ、当初は、警察の官僚上がりだというので緊張もしましたが、それが全くの正反対(笑声)。官僚臭などカケラもない、誠実そのものの人柄の方でした。私の結婚式にも、わざわざ来て頂きましてネ、いろいろと、いいお話しをして頂きました。“では、菅沼喜久次クンのためにカンパイ…!”と、心から私を祝福して下さい、あの太い甲高い声が、今も心の中から離れません。

○結婚させられて、組合委員長に就任

ところで私は、昭和48年12月10日の天気晴朗の日に結婚しました(笑声)。39才の晩婚でしたが、1年後に、高田委員長が定年でリタイアされることがわかっておりまして、私が其の後釜になることが、ほゞ決まっていたので、やむなく(笑声) 踏み切ったわけです。組合長がチョンガーでは、誰にも

相手にされないぞと、高田委員長からも強く迫られまして…。結婚する前に、3役交渉の時、百瀬さんから“キミは、チョンガーのくせに、生活が苦しい”などと、よくまあ……（笑声）などと、セッカンされたことがありました。

（笑声）。委員長になってから、すぐの仕事は、営業所を独立会社にする……。さあ組合はどう対処するかという問題が起きました。続いてVHSの世界制覇にともなう海外駐在員の労務問題。VHD関係を含む技術者の超過残業問題などなど、問題は次から次に起きるもんですよ。平成2年に委員長を退任。ビクター労働組合連合会会長の方は、平成6年に引退しました。いま考えて見ると、時代の変化がそうさせたのですが、高田委員長はワンマンを押し通し、私は皆の意見を聞いた上に、自ら最大公約数の解答を出すという、やり方を取りました。今から思えば、私の組合活動は、決してそれが天職だったわけではありませんが、此の道を、ひたすら歩み続けたのは、やはり、高田委員長のソバに私が座らせられたからだ、と、つくづく考えます。それにもう一つ、周囲の方々が、私を支持して下さったからこそ、此の道を最後まで歩み続けることが出来たのだと思いますよ。

○私はカラオケとゴルフに生きる

— 昨年からはまった9月13日創立記念日のカラオケ大会、見事にマヒナ・スターズ賞を菅沼さんが獲得されましたが……（笑声）

（菅沼）今年は岩崎辰吉さん他、歌の上手なビクターOBの皆さんが大勢参加されるらしいので、今年の王座は無理でしょう（笑声）。女性の方は、今年も佐野直美さんでしょうネ……（笑声）

— 創立記念日恒例のカラオケ大会は、今年からビクター歌謡音楽振興室の協賛で盛大に開催します。場所は「すすきの恋歌」（ビクターPRTS-373）の田中美代子さんが経営する歌謡スナック「ニュー花束」、JR高田馬場駅からすぐです。

（菅沼）亀戸より近くて便利ですね、では一つ頑張りましょう（笑声）